2024年7月14日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

二人の「私」の救い

［創世記25章27～34節］

「二人の子供は成長して、エサウは巧みな狩人で野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした。イサクはエサウを愛した。狩りの獲物が好物だったからである。しかし、リベカはヤコブを愛した。ある日のこと、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れきって野原から帰って来た。エサウはヤコブに言った。「お願いだ、その赤いもの（アドム）、そこの赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。ヤコブは言った。「まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください。」「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」とエサウが答えると、ヤコブは言った。「では、今すぐ誓ってください。」エサウは誓い、長子の権利をヤコブに譲ってしまった。ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去って行った。こうしてエサウは、長子の権利を軽んじた。」

[1] 腑に落ちないエサウとヤコブの話

今日も旧約聖書の「創世記」の25章からです。先週の箇所をサラッと振り返ってみると、アブラハムの息子イサクとリベカの間に、結婚して20年後に待望の子どもが与えられました。祈りの中で神様が与えて下さった子どもたちでした。子ども‟たち”と言うのは、リベカの胎内に宿った生命は、双子の生命だったからです。創世記25:25-26にはこう記されていました。―「先に出てきた子は赤くて、全身が毛皮の衣のようであったので、エサウと名付けた。その後で弟が出てきたが、その手がエサウのかかと（アケブ）をつかんでいたので、ヤコブと名付けた」。

この双子は、ヤコブがエサウのかかとを掴みながら出てきたというのですから、殆ど同時期、ほんの数秒の違いしかないのではないでしょうか。

さて、この二人なのですが、ある出来事を通して、一方は神様の祝福を受け、一方は神様の祝福を失ってしまったという描き方をしています。この出来事の話は幼い頃から教会で聞いてきたという方もおられると思いますが、大人になってこの物語を読むと、ちょっと腑に落ちないものを感じないでしょうか？

[2] 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」？

皆さんがよく聞く（かもしれない）ここからのメッセージはこのようなものが典型的なものかもしれません。インターネットでも公開されていたあるメッセージを要約してみます。

「リベカから生れた二人は成長して兄のエサウは巧みな狩人で野の人となり、ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常としました。イサクは狩りが得意のエサウを愛し、リベカはヤコブの方を愛しました。ある日、ヤコブがレンズ豆の煮物を作っていると、丁度エサウが狩りから疲れて戻り、それを自分にくれと願いました。ヤコブは「まず、あなたの長子の権利を譲って下さい」と言うと、何とエサウは「腹が減って死にそうだ。長子の権利など構わん」と言い放ち、彼は弟が作ったレンズ豆の煮物を食べ、立ち去りました。長子の権利、それは家族の長を受け継ぐ権利であると共に、神様の祝福を受け継ぐ特権でもあったのです。しかし、エサウは一杯の煮物を欲しがる欲望のため、長子の特権を譲ってしまったのです。彼は目先の物事に目がくらみ、目に見えない神様や、神様の祝福というものの素晴らしさを捨ててしまいました。私たちは、永遠の価値が分からない愚かなエサウのようにはならないようにしましょう。」

確かに新約聖書ヘブライ人への手紙にもこんな言葉があるのです。―「誰であれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな俗悪な者とならないように気をつけるべきです」（12:16）。

しかし、今朝のメッセージをこれで終わる訳にはいきません。これで終わったらあまりにも短絡的です。「エサウのようにならないように」。これが一番大事なメッセージなのでしょうか？エサウとヤコブのことについて書かれている言葉で、新約聖書の中にはこのような言葉もありますね。―「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」（ロマ9:13）。ちょっと躓きを覚える御言葉ではないでしょうか？えっ？神様の「選び」というのは、私たちにとってはどうしようもないそんな恐ろしいものなのですか？と問いたくなります。しかし、パウロが「ローマの信徒への手紙」の中で言っている文脈は、よく読むと、永遠の審きというよりも、キリストにおける神様の憐みの大きさを語っているのです。それでは「エサウを憎む」とはどういうことなのか？そのことを考えてみたいと思いますが、私は先週もお話しましたが、この創世記のエサウとヤコブの物語の描き方で、一つ気が付いたことがあります。この二人は、「兄弟」なのですけれども、「双子」なのだということです。（聖書で「双子」のことが書いてあるのは、12弟子の一人トマスが、‟ディディモと呼ばれるトマス”とあります。ディディモとは、「双子」のギリシア語読みだそうです。使徒トマスは双子だったのでしょう）。

私は、やはりこの「双子」ということに注目したいと思うのです。きっと双子生まれの人から見ると、もう一人の兄弟というのは、別人格といえども、もう一人の自分を見るような独特の存在ではないかと思うのです。そして本当はどちらが長子で、どちらが次であるかという順番は分かりませんよね？分かるのでしょうか？神様は殆ど同じ時期、同じ胎内に命を与えられているのだと思います。

[3]　私の中の「双子」を愛していこう

そして更に、どちらかが神様に愛されて、どちらかが神様の呪いを受けるという、どう捉えたらよいか分からないことですが、私はここに、イエス・キリストの十字架の愛の極みを思ったのです。

　と言いますのは、私自身の中にもエサウがいるようにも思うのです。皆さんはいかがでしょうか。何でもよいのですが、一時的な願望や欲望に駆られ、過ちを犯してしまう可能性が自分にはないと言える人がいますか？よく日本語で「魔が差した」と言いますが、それは「悪魔が心に入りこんだように、一瞬判断や行動を誤る。出来心を起こす」という事だと辞書に書いてありました。人間というのは、時に自分でも驚くような過ち・失敗をしてしまう者です。ですから、一体誰が罪に負けた人、つまりエサウを叩けるのかと思います。勿論それが、社会的なルールから外れてしまったような場合、そのこと自体は法に則って裁かれてしかるべきだと思います。しかし、人間は過ちを犯す動物です。それは覚えていたいと思います。そして、エサウだけが酷いのかと言ったら、いえいえ、ヤコブもなかなかずるいです（来週また見ますが）。人間というのは、そんなにすっきりした存在ではありえない、そのことを聖書は創世記から語っていると思うのです。自分の中に分裂した自分がいる。あの伝道者パウロも自分の内側を見つめながらこう語っているではないですか。ローマの信徒への手紙7：15、17-18です。―「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです」

　パウロは、自分の中に対立する二人の自分がいることを告白していますね。私たちもそうです。私たちの内側には、そうです、「双子」がいるのです。優しい心の私もいれば、残酷になれる私もいる。光の中の私もいれば、影に覆われる私もいる。或は、若い時の自分と年老いた時の自分、健康な時の自分と病を得た時の自分などなど…。その「双子」のどちらもが、この私自身を形成しているのです。死ぬまでそうです。そして、それでいいと聖書は語っていると思います。なぜなら、キリストが十字架において、私たちの罪を全部背負って下さったからです！十字架とは、私の中のエサウを憎み、裁き、その呪いというべきものを主が負って下さったことなのではないでしょうか。そして私たちは、一方的に祝福を頂いたヤコブの如き存在として下さっている。私はそう信じています。そうであれば、パウロが言ったこの告白に私たちも声を合わせることが出来ると思います。ローマ7:24-25。―「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」。

おかしな言い方ですが、「わたしの中の双子」を愛してゆきましょう。創世記でも、この後の‟ヤコブ物語”とは、やがて放浪の長い旅に出たヤコブが、もう一度古里に帰って来てエサウと再会する感動的な場面（33章）に繋がっています。もしエサウが一方的に裁かれていくだけでしたら、このようなことはなかったと思います。この創世記の話は、私たち、自分ではどうすることも出来ない、心も生活も自分では制御できない私たちに、あなたという存在をとことん受容するから、そして祝福するから、安心してわたしに従ってきなさいという、主イエス様の招きがここにあるのではないでしょうか。…また来週エサウとヤコブの話を見てゆきます。今度は27章です。予め読まれることをお勧めします。お祈り致します。